

戦後50年「八幡大空襲・水巻町捕虜収容所」 の思い出

遠賀郡水巻町 川野 正

昭和19年12月（私が14才の時）、折尾郵便局電信係（モールス通信）に勤務していた頃から、一段と戦争が激しくなって来ていて、北九州地区にも、昭和20年4月から毎夜のようにB29が飛来、上空は照空灯と高射砲（曳光弾）で夜空を真っ赤に染めていた。

北九州地区における大きな空襲といえば、昭和19年6月16日夜半（日本列島においての初めての空襲）と同年8月20日、21日夜半、及び昭和20年8月8日（終戦前の最後の空襲）の大空襲ではないでしょうか。

この日、八幡市春の町にありました八幡電報局へ所用のために行くところでした。

すでに、北九州地区には午前7時25分に警戒警報が発令されていて、母は今日は外出を見合わせた方がよいと、心配してくれました。

午前9時30分頃に、西鉄電車折尾駅より乗車し、折尾から西前田電停に着いた頃のこと（午前10時頃）、外の様子を電車の窓際から見ていると、すでに空に向けて高射砲が打ち上げられており、雲のすき間を通り抜けて見え隠れしている敵機戦闘機の姿をはっきりと見ることができました。

すでに、敵機が来襲しているのに、私には、空襲警報、敵機来襲という「サイレン」は聞こえなかった。この時、「約200m先の線路上に焼夷弾が落ちた」と叫びつつ、防火頭巾をした数人が、消火作業に当たっていました。

電車が進行できなくなったので、運転手は「早く車内から下りて退避して下さい」と、告げた。一早く電車から降りて線路に添って、20m程走り、近くの防空壕に避難する。

防空壕には多数避難していましたが、私は壕の出入口に暫く立っていて、外の様子を眺めるように見ていると、上空から油紐のような物が次から次へと降下して来るのを目撃した。

その後、出入口の側から離れて、両手で眼と耳を押さえて地に伏していましたが、するとこの壕の上から「どしん」と音がして砂ぼこりが落ちて来た。壕の出入口の両柱が炎で燃え出した。防空壕の奥の方から早く避難しろと、叫び声が起った。爆音を立てて、何回も何回も旋回しながら焼夷弾を投下して行った。工場地帯の上に防護用の煙幕が貼られていた。私はまずB29の爆音が大から小に移り代わった隙間に、次の防空壕へ避難して行った。どのあたりを走っているか、無我夢中でした。

時折機銃掃射の音を聞きましたが、周辺はエレクトロン焼夷弾が落ちていて、地上が熱く感じられました。また道路に添った住宅もところどころに火炎が発生していた。

2回目の防空壕にたどりついて、この辺りも焼夷弾攻撃の目標となっていた。この頃、風は

西から東へと吹いていて、辺りは火の海となって炎が東へと音を立てて流れていった。

B29の焼夷弾、爆弾の投下が終わって、爆音も遠ざかって去って行った時に、私はこれで助かった、生き伸びることができた実感した。そして暫くしてこの防空壕から出ようとした時、付近に落ちていた不発弾が爆発して爆風がこちらの方まで来たので退避し、助かった実感も消え失せた。皮肉にもこの後、夕立のような強い雨が降り出し、身に付けていた帽子と靴をなくしたが、気がつかなかった。

防空壕から出て、素足で急ぎ、足取りも早く自宅へと帰って行った。

帰宅して母は私の姿を見て大変安堵した感じであって、水巻町の方で見ていた八幡辺りの爆弾の模様を涙ながらに話してくれた。即ち、あまりにも多数のB29が飛んで行った事に非常に驚愕した様子でした。

この大空襲で亡くなられた方の御冥福を心からお祈りし、50年経過した今日でも、平和の尊さをしみじみと痛感しています。

私が住んでいた水巻町では、昭和19年4月頃から、続々と南方から送られて来た連合軍兵士の捕虜収容所がありました。主にオランダ兵士をはじめ、イギリス、オーストラリアの兵士でした。

捕虜収容所の屋根には、収容所である事の標識が見えており、遠くからも識別できた。捕虜を炭鉱（日本炭鉱）の坑内夫として激しい労働に従事させていたようだ。

この頃になると、日本人でも食糧不足で困っているのに、捕虜兵士は、なおさらのこと、激しい労働も加わって栄養失調で倒れて行く者が多く、亡くなった方は多数と聞いていました。私は日本炭鉱、高松炭鉱の所有する『頃末中央病院』へよく行っていた頃、時々痩せ衰えた兵士の姿を見ていました。

8月15日終戦の日、アメリカのダグラス輸送機が、収容所兵士に物資を落下傘で投下していたが、風がある時は風に流されて遠くまで（中間市中鶴）飛んで行き、広々としたレンコン堀りに着水していった。その後から車に乗った収容所の兵士が追いかけて来て拾っていたが、その時に、付近に住む日本人の方が、珍しいので先に追いかけて行ったものであるが、兵士はこのような日本人を追い払うことはしなかった。むしろ私も含めて、落下傘の紐でバンドを作れと、兵士から貰ったのである。こんな収容所兵士の心からの贈りものに感動した。

収容所の兵士たちは、数日経ってそれぞれの祖国へ帰国して行かれたが、日本での苦しかった捕虜収容所の追憶の思い、いかばかりか、戦後50年に当てもう一度思い直したい今日である。